

女子大学における学生の満足度要因の重要度に関する 3 次元的分析

星野敦子・安達一寿・若山皖一郎・中尾茂子・阿部 史

十文字学園女子大学社会情報学部

1. はじめに

近年、大学の外部評価が広く実施されるようになっており、評価基準として、学生に関わる項目が多くあげられている。特に一部の研究を主とする大学を除いては、教育の成果や学生支援が評価の重要な要因となっている。本研究は、学生の大学生活の満足度を決定する各要因の重要度を測定し、評価と組み合わせることにより、効果の高い改善策を示す方法を提案することを目的としている。段階評価と要因の重要度を組み合わせる方法は、星野他（2007）においてすでに提案しているが、本研究では段階評価の評価項目と、重要性をはかるための項目をはじめから関連付けて設定し、分析手法の特長を十分に政策に生かせるように図っている。重要度の測定にはコンジョイント分析を用いた。コンジョイント分析は、複数の評価要因のもつ水準（属性）に対する回答者の選考データから各要因の重要度と好まれる属性を求めるものである。従来マーケティングリサーチの分野で利用されてきた分析手法であるが、近年では環境評価や教育・福祉の分野でも活用が進んでいる。

2. 分析の方法

分析の対象となったのは、十文字学園女子大学社会情報学部の学生である。現在のところ有効サンプル数は 302（1 年生 52.6%、2 年生 35.8%）であり、1, 2 年生が中心となっているが、調査を継続しており、今後 3, 4 年生のサンプルが追加される予定である。本稿では研究概要と現段階での分析結果について報告する。

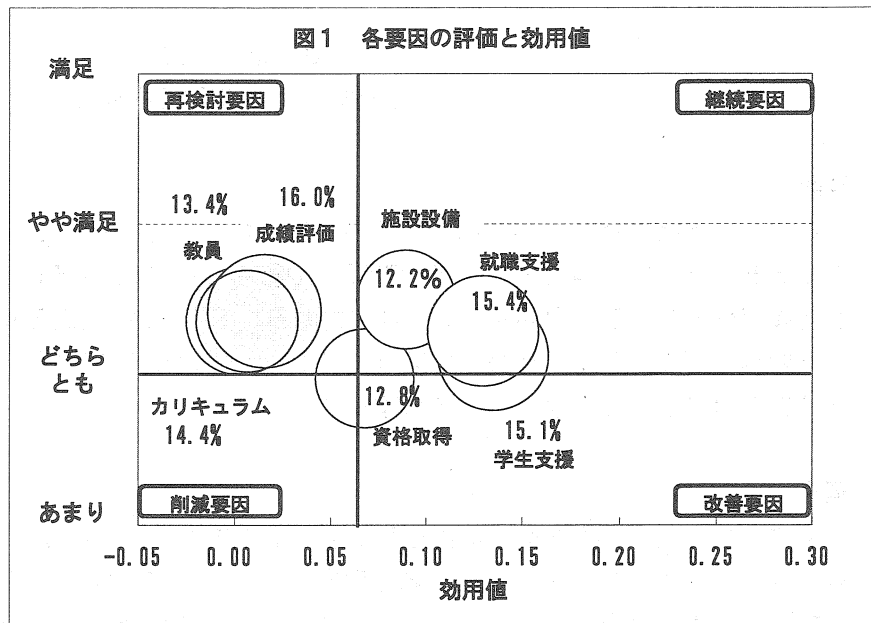
アンケートは、コンジョイント分析のための調査と評価項目の段階調査を同時に実施した。評価項目は大学評価・学位授与機構（2004）によって示されている大学評価基準に基づいて、学生に関連のある項目を利用することとして、①カリキュラムにおける専門性のレベル ②授業科目の種類と内容の豊富さ ③成績評価の方法と基準 ④資格取得に関する支援体制 ⑤学生に対する個別支援のあり方（履修・進路相談、カウンセリングなど）⑥学生に対する大学窓口の対応（教務課、学生課など）⑦PC などの情報環境の状況 ⑧教室の空調・AV 機器等の設備の状況 ⑨購買・カフェテリア⑩教員の学生に対する対応 ⑪教員の授業に関する姿勢 ⑫就職のためのイベントや指導の状況 ⑬就職に関する情報提供の状況、の 13 項目を設定した。またこれらの 13 項目に対応するコンジョイント分析の 7 要因を設定した。これらの要因と各要因の水準は表 1 の通りである。評価項目の段階評価の結果と、コンジョイント分析の結果得られた各項目の部分効用値ならびに相対重要度をそれぞれバブルグラフの y 軸、x 軸、バブルの大きさにとり、バブルグラフを作成し、3 次元的分析を行った。さらに、大学生活の総合満足度、入学時と比較した満足度の変化と、要因重要度の関係についても分析を行った。

表1 分析のための要因と水準

要因 水準	カリキュラム	成績評価	資格取得	個別学生 支援	施設設備	教員	就職支援
1	専門性が高い	客観的基準が明確	指導的	導入あり	充実	研究中心	充実
2	多様性が高い	やや流動的	条件整備的	特になし	標準的	教育中心	標準的

3. 結果と考察

満足度調査の結果、最も評価が高かったのが「情報環境 (3.73.)」であり、最も低かったのが「事務窓口対応 (2.86)」であった。ほとんどの項目が3.3~3.5であり、総合満足度の平均は57.8%であった。図1は段階評価の結果とコンジョイント分析の部分効用値及び相対重要度をバブルグラフに表したものである。コンジョイント分析の7つの要因に対して、複数の関連評価項目がある場合にはそれらの平均値を用いた。x軸に部分効用値、y軸に段階評価をとり、バブルの大きさは相対重要度を表している。満足度のラインは3.0(どちらともいえない)、効用値のラインは全要因の平均値(0.064)である。網掛けのバブルは効用値から求めた相対重要度が、相対重要度の平均値より小さかった要因で、



効用値は小さいが、実際には重要度が高く、回答者の選好にばらつきがあることを示している。すなわち、各自の重要度は高いが、好む水準にばらつきがあるために、平均効用値が低くなっているということになる。これらの要因については、回答者ごとの詳細な分析が必要であるが、グラフ上では右側の象限に移動させて解釈するほうが望ましいといえる。

全体的に要因の重要度に大きな差異は見られないが、平均重要度が最も高いのは「成績評価」、次いで「就職支援」「学生支援」である。「就職支援」と「学生支援」については学生の選好がほぼ一致しておりいずれも積極的な支援を求めているが、前者に比較して後者の方がやや満足度が低い。また、「成績評価」についても満足度は比較的高めであるが、「客観的基準が明確」である方がいいと考える学生と、「やや流動的」である方がいいと考える学生で意見が分かれている。同じく、「教員」および「カリキュラム」についても好まれる水準が大きく分かれる傾向にあり、その結果、平均重要度が高いにもかかわらず、効用値は非常に小さくなっている。本学の場合、「多様性のあるカリキュラム」が好まれると考えていたが、学生の意見にばらつきがあり、平均効用値をみると、むしろ「専門性の高いカリキュラム」の方がより好まれていることが明らかとなった。

4. 結果と考察

3, 4年生のデータをあわせて、学年、専攻ごとの分析を進めることで、学生の実態がよりの確に判断できるものと考えられる。また、コンジョイント分析は回答者一人ひとりのプロファイルが求められることから、各自の属性(学力、成績、意欲など)に即した分析を行うことで、データのより一層の有効活用が図られると考えられる。

参考文献：大学評価・学位授与機構(2004)『大学評価基準(機関別認証評価)』

星野敦子、北原俊一、新行内康慈、安達一寿、綿井雅康、牟田博光(2007) 段階評価における項目の重み導入による三次元的分析の試み—大学における授業評価分析を事例として—、日本評価研究 第7巻第1号、pp105-116